

リ  
セ  
ツ  
ト  
14

◀フレイル

魔法師団に所属している、  
精霊使いの青年。  
他人にはその力を秘密にしている。

◀リュシオン

クレセニアの王太子。  
強大な魔力を持つ  
魔法使い。

ユアン▲

ルーナの次兄。  
魔法の才能があり、  
魔法師団に所属している。

▲ネイディア

リュシオンの異母妹である、  
クレセニアの王女。  
なんと魔族として覚醒して——？

◀焰王

▶風姫

▲カイン

ルーナに助けられ、  
公爵家に身を寄せていた、  
エアデルト国の第二王子。  
現在はクレセニアに留学中。

▲ルーナ

ちゆき  
千幸が転生した姿。  
リヒルーチェ公爵令嬢。  
前世の記憶と強大な魔力を  
持ちつつ人生やり直し中。

シリウス▲

◀レグルス

◀水姫

ルーナの守護者たち

◀千幸(享年18歳)

超不幸体質の女子高生。

## 第一章 アンセルの町

あなたは、彼のために笑う。わたしは、あなたに何ができたのでしょうか？

その知らせがルーナの耳に届いたのは、新年を迎え、ひと月が過ぎようとした頃だった。冬期休暇中のルーナは、王都にある公爵邸の自室にて寛いでいた。

「奇病？」

「そうなんです、ルーナお嬢様。先ほど買い物に出た者が聞いてきたのですが、怖いすわね」  
お茶の給仕をしていたメイドの話に、ルーナは読んでいた本から顔を上げた。  
彼女の興味を引いたのに気づき、メイドはさらに続ける。

「なんでも、突然気を失って倒れ、それが頻繁に起こるようになるらしいのです。そしてだんだんと衰弱していき、最終的には意識が戻らなくなるとか。食事も摂れなくなるので、そのままでは死に至るとい話ですわ。いったい、どんな病まわいなんでしょう？」

「気を失って、衰弱……」

「はい。仕事や買い物中、皆、それまではなんの病やまいもなく、健康そのものだったみたいすわ」

「お医者様や、薬師には診てもらったの？」

一般庶民が、貴重な白魔法使いの治療を受けるのは難しい。

しかし、市井にも薬師、そして少数だが医者も存在する。彼らでも、大抵の病や怪我には対応できるのだ。

「はい。ですが、原因は不明だそうですわ。兆候も何もなく、お医者様や薬師が診察しても皆、首を傾げるばかりみたいです」

「そう。そんな奇病が……」

「最初は東区の外れで何人か患者が出たそうなのですが、だんだん増えているようですわ。原因がわからないって怖いすわよね。ルーナお嬢様もお気をつけてくださいませね。何しろレングラント学院は東区にあるのですし」

「そうね。でも、学生は学院の敷地からは出ないから」

「なら、安心ですわね」

にっこりと笑うメイドに、ルーナも笑みを返す。

しかし、その内心は、嵐が吹き荒れていた。

「少し一人になりたいの。給仕はいいから、下がってくれる？」

「はい、かしこまりました。ご用がございましたら、お呼びください」

「ありがとう」

メイドが去っていくのを見送り、ルーナは胸元のペンダントトップに手を触れた。

中央にダイヤが置かれ、その周りを花卉のように、色鮮やかな宝石が囲んでいる。

見た目は美しい装飾品だが、これは新たにルーナが作成した〈通信〉の魔道具だった。

彼女が魔道具として開発したそれは、前世である日本で使用していた携帯電話をもとにしている。

ルーナが前世——高崎千幸という少女であった頃の記憶が、こうした魔道具を開発するきっかけだった。

〈通信〉の魔道具は、彼女が幼い頃に作成したもので、すでに発表されてから数年が経っている。

最近では公共の場にも設置され、一般市民にもなじみが深くなってきた。それに伴い、機能も洗練されてきている。

以前は、対になる〈通信〉の魔道具同士のみで会話するというものだった。

しかし現在では、数力所ならば通信先を登録でき、それぞれに連絡できる。その技術に加え、ルーナは登録先の者全員と一度に会話ができる機能を取りつけた。

日本でよく使われていた通信アプリの、グループ会話を参考にしたのだ。

さらに、登録者の魔力を〈追尾〉する機能や、紛失の際は遠隔で破壊する機能なども盛り込んでいる。

そうしてできた新しい〈通信〉の魔道具が、ルーナが今、身につけているペンダントだった。

同じ機能のものを、リュシオン、カイン、フレイル、そして、兄二人に贈ってあるため、やり取りするのが大変楽になっている。

各自と連絡を取る場合は、それぞれ相手先を決めた宝石——正確には魔石——に触れるだけだ。

全員と連絡を取る場合は、中央の魔石に触れながら魔力を流せばいい。

ルーナは、中央の魔石に指で触れ、魔力を流す。これで、全員にルーナからの呼び出しが伝わる。もともと、相手は多忙を極める者たちだ。

呼び出しに気づいても、応じることができない場合も多い。その時は、後で連絡をするようにならかじめ決めていた。

「みんな、知ってるのかな……」

ルーナは、ペンダントを手で弄りながらつぶやく。

それに反応したかのように、リンリンという鈴の音が彼女の耳に響いた。

「リュシオンだ。ルーナ、どうした？」

「カインです。大丈夫ですか？」

リュシオンとカイン、二人の声がペンダントから聞こえてくる。

ここクレセニアの王太子であるリュシオンと、隣国の王子であり、現在は伯爵という肩書でこの国に留学しているカイン。

多忙な彼らだが、偶然にも魔法道具マジックツールの呼びかけに応える時間があつたようだ。

しかし、魔法師団員として働くフレイルとユアン、そして、リュシオンの側近として働く長兄ジーンは、手が離せないのか応答がない。

そのためルーナは、ひとまず連絡のついた二人に話すことにした。

「二人とも、忙しいところごめんね」

「問題ない。何があつた？」

リュシオンの問いに、ルーナは先ほどメイドから聞いた噂話を告げる。

「聞いたことあつた？」

「いや、俺の方には報告がないな」

「数人ということですから、近い者たちの間で広がっているくらいなのでしょうね。ですが、まだ患者が増えるのであれば問題です」

カインの言葉に、ルーナは大きくうなずいた。

「奇病か……」

「症状を考えると、似てますね」

「ああ」

「やっぱり、二人もそう思うよね……」

奇病ということ、そしてその症状を聞いた時、ルーナには思い浮かぶものがあつた。そしてそれは、リュシオンとカインも同様のようである。

「二ヶ月前のことと、何か関係あるのかな？」

「わからん。だが、そうそうあのような病やまいが蔓延まんえんするとは思えない」

「リュシオンの言う通りです。となると、やはり関係していると見て間違いなさそうですね」

「あれと同じ奇病……」

ルーナはそうつぶやくと、二ヶ月前の出来事を思い返した。

数ヶ月前。

ルーナは、リュシオンの異母妹であるネイディア王女の付き添いとして、ヴィントス皇国に向かった。

その滞在中、ネイディアと共に魔族の襲撃を受け、攫さらわれる事態に陥おちいる。しかし、共に攫さらわれたと思ったネイディアは、実は犯人側だったのだ。

自分は魔族であると語った彼女。

にわかには信じられない話だが、実際に魔族——バルナドといるところを見れば、魔族かどうかはともかく、敵であることはルーナも信じざるを得なかった。

ネイディアは、捕まえたルーナを亡き者にしようとするものの、彼女にかけられた護まもりの前に叶わなかった。

そのためネイディアは、別の手段を用もちいることにする。それが、ルーナに呪いをかけることだったのだ。

呪いは、ルーナに関する記憶をリュシオンとカインから消すというもの。彼らから見知らぬ者のような扱いを受けるのは、ルーナにはとても辛いものだった。

そうした精神的苦痛を与えるとは別に、魔族という脅威と戦う上で、絶対に必要な者たちの絆きずなを

壊す狙いもあったのだろう。実際に、二人にルーナが忘れられたことで、大きな不便が生じた。

さらには、魔族のせいとは断定できないものの、ルーナを守護する精霊たちの姿も消えてしまったのだ。

ルーナは、心細い状況の中で、一人なんとかしようと奮闘するしかなかった。

そこで、ネイディアの呪いを解くために必要になったのが、『神宝』である。それも二つ。

一つはルーナが持っている短杖ロッドを使えるが、問題は残りの一つを集めることだった。地下神殿で見つかった短剣の神宝はあるものの、それはリュシオンが管理している。

普通ならばリュシオンに事情を説明して借り受けるだけで、まったく問題ない。だが、その時の彼は、ネイディアの呪いによりルーナを忘れていた。そのため、ルーナに対して信頼などなかったのだ。そんな人間に、自らが持つ神宝など貸し与えるはずがない。

困った事態になったルーナだが、それは偶然にも王都を訪れたコットという、以前知り合った獣人の青年により解決する。

彼の持つチャクラム型の神宝と、ルーナの持つロッド。

二つの神宝に加えて、マルジュ高原にある神域——それを守る聖獣のおかげで、ルーナは呪いを解くことができたのだった。

ルーナたちが呪いを解くべく奔走していた頃、ヴィントス皇国に足止めされていたフレイルとユアンは、新たな神宝の行方ゆくえを追っていた。

そして、手がかりとしてわかったのが、キルスーナ公国の住人である人物。

その人物に会うべく、ルーナはリュシオンとカインの二人と共に、キルスーナへと向かったのだ。

†

キルスーナ公国。

ヴィントス皇国の北にある小国群の一国だ。横に細長い国土を持ち、そのほとんどが険しい山地となっている。

そんなキルスーナ公国の西の端に位置する、小さな港町アンセル。

貿易船などの大きな船が就航する港ではなく、地元の漁師たちが使用する船が並ぶ、少しばかり寂れた漁師町だ。

ルーナたちは、異例の早さで準備を進めると、一週間後にはこの町に辿り着いていた。

理由が理由だけに、〈転移門〉を使用しての強行軍である。

「あれがアンセルか……」

町へと続く山道から、眼下に広がるアンセルの町を見下ろし、リュシオンがつぶやく。その横では、カインとルーナが同じように町を見下ろしていた。

背後には、三人が乗ってきた馬車が停まっている。御者は地味なお仕着せを着ているが、リュシオン配下の兵士だ。

よく心得た彼は、ルーナたちの邪魔をしないよう、静かに御者台で待機している。今回彼は、フレイルとユアンに合流した後、入れ違いで帰国する手はずになっていた。

「田舎町という感じですね」

アンセルの町並みに、カインがそう感想を述べる。

港を中心に広がる町には、多くの家が密集して建ち、海岸には数隻の船が見えた。町並みは雑然とした王都の下町を彷彿させる。

「あそこに手がかりがあるんですね」

カインは、目を眇めて町を見つめた。

彼らの常識——クレセニアやエアデルト国内の町と比べれば、村と言っているいい規模である。

だが、ここはキルスーナ公国。

平野部の豊かな大地に人口が集中しているため、こうした辺境の地では、この程度でも近隣で一番大きな町であった。

「リュー、兄様たちが来るのを待つのか？」

ユアンとフレイルは、ヴィントス皇国から直接アンセルに向かうことになっている。使節団はそのままクレセニアへの帰途につくが、二人だけは別行動なのだ。

ルーナの問いに、リュシオンは少しの間考え込む。

「アンセルに到着するのは同時くらいとは言っていたが……一度連絡を取った方がいいかもしれないな」

「そうだね。じゃあわたし、魔道具<sup>マジックツール</sup>で訊いてみるよ」  
「頼む」

ルーナは、服の下から〈通信〉の魔道具<sup>マジックツール</sup>であるペンダントを引っ張り出した。  
ユアンに通信が繋がる、花弁をかたどった黄水晶に触れる。するとすぐに、ユアンの声が聞こえてきた。

「ルーナかい？」

「ユアン兄様、ルーナです」

「どうしたんだい？ 何かあった？」

心配そうなユアンの声に、ルーナは慌てて否定する。

「何も無いよ。あのね、わたしたち今、アンセルの町のすぐ近くまで来てるの。兄様たちはどうなのかなんて」

「なるほど。僕たちも町に続く山道に入ったところだから、そんなに離れてはいないんじゃないかな？」

ユアンの説明を受け、ルーナは指示を仰ぐために、リュシオンを見た。

「近いのなら、合流してから向かおう」

「了解です。じゃあ、少し急ぎますね」

「ああ、それまで俺たちは休憩でもしてる」

「わかりました。では」

「兄様、フレイ、気をつけてね」

最後に声をかけると、ルーナは通信を切る。

そして、ペンダントを元通り服の下に戻した。

魔道具<sup>マジックツール</sup>という点だけでも高価だが、ルーナのペンダントは装飾品としても価値がある。無用なトランプルを避けるため、いつもは隠していた。

同じような理由で、彼女たちの服装は、地主階級<sup>ジェントリ</sup>や裕福な商人などが着ているようなものになっている。

あまりに庶民的なものだと、今度は特権階級の者とのトラブルが予想されるため、このぐらいの身分しておく方が安全なのだ。

小国の下級貴族や地主階級<sup>ジェントリ</sup>ならば、庶民との垣根も低いため、それほど恐れられることもない。今回のアンセル訪問は町の間にも接触するため、こうした気遣いも必要だった。

ユアンたちが合流するまでの間、ルーナたちは道の端で休憩することにする。

魔道具<sup>マジックツール</sup>のポットを持ち込んでいたため、すぐにお茶を淹れることができるのだ。ちなみにこれは、庶民の間にも広まっているもので、特に周囲の目を引くこともない。

バスケットに入って大人しくしていたシリウスとレグルスも、今はルーナの膝の上で寛いでいた。その様子にはっこりしつつも、ルーナの表情が僅かに翳る。いまだ風姫<sup>ふうきみ</sup>や水姫<sup>みづきみ</sup>といった精霊たちの行方は不明のままなのだ。

とはいえ、精霊王である彼らは簡単に危機に陥るような存在ではない。もともと唐突にルーナの



傍を離れることもあったため、彼女は何か事情があるのだろうと信じて待つことにしていた。それでも心配は尽きない。同じ守護者である二匹を見るたびに、否応にも精霊たちの不在が思い起こされるのだ。

暗くなりそうな思考から、ルーナは無理矢理かぶりを振って離れる。

そんな風に休憩時間を過ごしていると、リュシオンがじつとカインとルーナを見つめた。

「何、リュウ？」

不思議そうに首を傾げるルーナに、リュシオンはポツリとつぶやいた。

「いや、俺たち全員で兄妹設定は無理があるよなあ」

「でしょうね。まず髪の色がバラバラですし。兄妹だとしたら全員母親が違うとか、そういうことにしないと無理でしょうね。それでも似ていなさすぎますけど」

カインの言葉に、リュシオンは深々とうなづく。

ルーナは銀色の髪、リュシオンは黒、カインは金茶色で、フレイルは紫紺の髪だ。そして、唯一本当の兄妹であるルーナとユアンだが、ユアンは金髪の上に、双方それぞれ父似、母似の顔立ちとすることで、パツと見は血が繋がっているようには見えない。

五人全員が兄妹というのは、リュシオンが言う通り、さすがに無理があった。

「ルーナとユアン、カインが兄妹、俺とフレイルはその友人というのが、一番無難か……」

ユアンとカインの髪色は近い。そしてルーナとユアンは多少見た目の違いはあるものの、本当の兄妹のため、一番納得されやすい組み合わせと言える。

「それなら、なんとか」

「でも、わたしたちってどういう理由で、この町に来たことにするの？ 素直に人捜しをしてますって言っちゃっていいのかな？」

「まあ、人捜しは言ってもいいだろう。立ち入ったことを訊かれたら、家の名誉に関わるとでも言っておけばいい」

ルーナの疑問に、リュシオンは淀みなく答える。

貴族、またはそれに準ずる階級が体面を気にすることは庶民にも周知されているため、そう言えば大抵の者は勝手に察して黙るのだ。また、そうした事情は、一番下の位である男爵や、騎士爵などの準貴族ですら、例外ではない。下手に突っ込めば不敬で処罰されることもあり得るため、わざわざ自らを危険に晒す者はいないはずだ。

そんな話をしていると、背後から蹄の音が聞こえてきた。

一斉に振り返ると、予想通りそこには、フレイルとユアンの姿があった。魔法師団の制服では目立つためか、リュシオンやカインと似たような富裕層の旅装をしている。

「兄様！ フレイ！」

ルーナが手を振ると、彼らは近くまで来て馬を止めた。

「思ったより早かったですね」

「よかった。そんなにお待たせしてないみたいで」

ユアンとフレイルは、馬を下りるとリュシオンとカインに恭しくお辞儀する。

昔と違い、魔法師団に所属し、国に仕えるようになったユアンとフレイル。それも有り、こうして畏まった態度を取っている。

「ああ、やめるやめる。おまえらに敬うやまられるとか、むず痒がゆくなる。公式の場合とはかく、今は前みたいでいい」

「ええ。僕もそれで」

リュシオンとカインがそれぞれ言うと、ユアンとフレイルは苦笑しながらうなずいた。

「さっき話していたんだが、ユアンとカイン、そしてルーナが兄妹という設定で、俺とフレイルはその友人ということにする。だから余計に、敬うやまった態度なんかされたら困るわけだ」

「わかりました——あ、わかったよ」

リュシオンの視線を感じたユアンは、意識して口調を変える。それに満足すると、リュシオンは皆を見回した。

「じゃ、そろそろ出発するか。二人の馬を馬車に繋いでくれ。こっちの一頭はあいつが乗っていくから」

「了解です」

「はい」

ユアンとフレイルは、すぐに乗ってきた馬を馬車に繋つなげる。

そうして、全員が馬車に乗り込むと、御者ごしやを務めてくれていたリュシオンの部下はお辞儀をして去っていく。それを見送った後、皆が乗った馬車はゆっくりと進み始めたのだった。



アンセルの町に着いたルーナたちは、さつそく宿を取ることにした。

メインストリートにある宿は、古びてはいるものの、貴人用の部屋もある立派なものだ。

一時期、この近くで大規模な盗賊団が結成され、それを討伐するため多くの騎士やその上官である貴族が滞在したためらしい。

三部屋ある貴賓室に、リュシオンとカイン、フレイルとユアンで一室ずつ、ルーナは一人でという部屋割りで泊まることになった。

貴賓室は二階にあり、彼女たちが泊まる三室以外には、会議ができそうな円卓のある部屋があるだけだ。

その部屋は貴賓室に泊まる客は使用自由のため、他の客を気にすることなく話し合うこともできる。

皆がアンセルに到着したのは、そろそろ夕方にかかる時刻で、周囲は暗くなってきた。今日はゆっくり旅の疲れを取り、明日から人捜しを決行することになった。

翌日、小鳥のさえずりが聞こえた頃、人々の活動する音も目立ってくる。

その音で、ルーナは目覚めた。

「う……ん。おはよう……」

眠い目を擦りながら、ルーナは枕の両側で、自分を覗き込むシリウスとレグルスに挨拶する。

「今、何時かな」

「七時少し前だな」

サイドボードの近くにいたレグルスが、時計を見て告げる。

「起きなきゃ……」

ルーナは身体を起こすと、身支度を整えるためにベッドから出た。彼女に合わせ、シリウスとレグルスもついてくるのが可愛らしい。

支度が終わると、ルーナは円卓の部屋に向かった。

宿の主人に頼み、朝食はそちらに運んでもらうことになっているのだ。

ドアを開けると、そこには全員が揃っていた。どうやら、ルーナが一番遅かったようだ。

「おはよう」

ルーナが挨拶すると、皆がそれぞれ挨拶を返す。

すでに朝食の準備は万全のようで、宿の従業員と思われる女性二人が、ワゴンと共に待機していた。

まだ若い従業員は頬を紅潮させて、チラチラとリュシオンたちを見ている。

田舎町にそぐわない美青年たちを目にすれば、その態度も当然だろう。

（皆、モテすぎじゃない……）

昔からよく見る光景ではある。それなのに、ルーナの胸がチクンと疼く。

(わたし、寂しいのかな……)

ネイディアの呪いによって、リュシオンとカインはルーナのことを忘れてしまっていた。その時の他人行儀な態度は、思ったより彼女に暗い影を落としていたようだ。

もやもやする胸の内に、ルーナがなんとも言えない気分になっていると、やがて女性たちの視線が彼女に集まる。

美青年四人の中に、紅一点のルーナだ。

どんな関係だと好奇と嫉妬の目が向いたのだ。そんな強い感情を向けられ、ルーナはつい怯んでしまう。

(うう……そんな睨まれても)

ルーナは内心でため息を零しつつ、引き攣った笑みを浮かべるしかない。

とはいえ、準備が完了すれば従業員たちの出番はない。彼女たちが名残惜しそうに出ていくのを見送り、ルーナはホッと息をついた。

食事をしながら行うのは、人捜しの詳細についての確認だ。

神宝の手がかりを持つと思われる人物の名は、ケネス。

ヴィントス皇国の皇弟、ユーリスの記憶から思い起こされたのは、その人物との出会いだった。表向き病弱を装っていたユーリスは、寝込んでいると称して世界中を渡り歩いていた。そんな彼が数年前、ここアンセルで関わることになったのがケネスだった。

ただ、わかっている情報が驚くほど少ない。姓は不明で、ケネスという名前のみ。数年前に少年だったので現在は成人しているらしい。容姿は特に目立つところはなく、よくある茶色の髪に茶色の瞳だという。

少年から青年へと年齢を重ねるごとに、容姿が様変わりすることは多々ある。その上、茶色の髪と瞳は、この世界でもよくある特徴だ。

そのため、名前がわかっている、すぐに見つかるとは限らない。

「まず、名前と年齢で訊いて回るしかないですね」

カインの意見に、皆もうなずく。

「それしかないな。あとはケネスという名前が、この辺りで珍しいものであつてほしいと祈るばかりだ」

「確かに……」

冗談っぽく告げたりリュシオンだが、皆は笑えないと顔を顰めた。

何しろ地域によつては、同じ年に生まれた者が全員同じ名前などということもあるのだ。ちなみにその場合、『どいどい』の、と必ず名字や屋号を付けて呼ばれる。

それほど特殊な地域は珍しいが、何かにちなんで付けられた名前だと、同年代に同じ名前が多くなる。

捜し人がそうした例に当てはまらないことを、ルーナたちは祈るしかなかった。

「心配しても仕方ない。とりあえず二手に分かれて、町の者に話を聞くしかないだろ」

「フレイルの言う通りだな。じゃあ、俺とカインとルーナ、フレイルとユアンで分かれて聞き込みだ」

「了解です。昼に一度、ここで合流すればいいですよね」

「そうだな。もし何かあれば、魔道具マジックツールで連絡を取り合おう」

ユアンにうなずき、リュシオンはそう指示を出す。

「では、僕たちは北の方を中心に。先に出ますね」

ユアンが席を立つと、続いてフレイルも席を立った。二人が出ていった後、リュシオンがルーナとカインに尋ねる。

「二人とも、すぐに出かけられるか？」

「ええ、大丈夫です」

「うん。平気だよ」

「じゃあ、俺たちも行こう」

「わたしたちは、南の方だね」

「ああ。まずはメインストリートの方から聞いていこう。雑貨屋なんかは、女のルーナが話した方がいいだろう」

「了解、任せて。とりあえず、しいちゃんたちは留守番しててねって言ってくる！」

ルーナは軽く自分の胸を叩くと、椅子から立ち上がる。そして慌ただしく部屋を出ていったのだった。

十

ルーナたちが宿泊している宿は、アンセルのメインストリートの中心にある。宿を起点として、南方向へ向かえばいいというわけだ。

メインストリートといっても、馬車が通れる幅がある道だけで、クレセニアの王都ライデルなどの大通りとは比べものにならない。

だが、町で唯一の商業地区なのだろう、通りには色々な店が建っていた。

北側は市場が開かれる広場があり、南側には雑貨屋や金物屋など、生活に密着した店が並んでいる。

「まずは、あそこの雑貨屋に行ってみるか」

「うん」

「いいんじゃないですか」

意見が一致したところで、ルーナたちは宿からすぐの雑貨屋に向かった。

ルーナが先頭に立ち、短い階段の上にあるガラス格子こうしのドアを開ける。すると、カランカランとドアについたベルが音を立てた。

「いらっしやいー！」

ドアを開けると同時に、元気な女性の声が響く。

ルーナが声の方向を見れば、ふくよかな中年女性がカウンターの向こうに立っていた。  
「こんにちは」

ルーナが声をかけ、その後ろからリュシオンとカインが続く。

三人が目に入ったところで、女性——その店の女将はぼかんと口を開けて固まった。

田舎町にそぐわない、美青年二人と美少女の登場は予想外だったのだろう。信じられないものを見たような反応である。

「えつと……」

女将の態度に困惑し、言葉を詰まらせるルーナ。その様子を見て、女将はようやく我に返った。

「へ、あ、な、何か御用かい？」

「すみません、少し伺いたいことがあるのですが」

「伺いたいこと？」

ルーナの言葉に、女将は首を傾げる。

「はい。実はわたしたち、この町で人を探しているんです。ケネスさんという男性なんですが、ご存じありませんか？」

「ケネスねえ……ケネス、ケネス……姓はわからないのかい？」

「そうなんです。年齢は二十代だと思のですが……」

「二十代の男で、ケネスねえ……」

女将は考え込むように目を閉じ、左右に頭を揺らした。

ルーナたちがじつと待つ中、女将はしばらくして目を開ける。しかし、次の瞬間には、申し訳なさそうに眉を下げた。

「悪いけど、思い当たらないねえ。ケネスつて名前の男は二人いるけど、中年親父と老人だからさ」「そうですか……」

しょんぼりするルーナに、女将はますます眉を下げたが、ふと思いついたように声をあげる。

「あつ、そうだ！」

「え？」

「ひよつとしたら、海治いの方の人じゃないかい？」

「海治い？」

ルーナが訊き返すと、女将が説明してくれた。

「アンセルは、こちら辺の『町』の人間と、海に近い場所にある『海治い』の集落を合わせて言うのさ。だが、町と海治いの人間は、あんまり交流することがなくてねえ……」

「何かあるのですか？」

カインが口を挟むと、女将は近くに来るよう手招きした。

そして、ルーナたちが近づくと、声を潜めて話し出す。

「海治いってのはね、魔物に村を襲われて逃げてきた者や、そういう村を捨ててきた者たちが作った集落なんだよ。そんな連中だから、海治いの土地しか住む場所がなくてねえ。けど、海からの潮風のせいとか、作物もあまり育たない痩せた土地なんだ。それで、町の人間より貧しい暮らしを余儀

なくされているわけさ。最初はそんな海沿いの人間を、町の者も哀れんだんだよ。でもさ、自分たちより裕福な暮らしをしてるってんで、突っかかってくる奴らも多かったんだ」

「どちら悪いわけではないが、同じ『アンセル』としては、納得できないというところか」  
リュシオンの言葉に、女将は大きくうなずいた。

「そんな感じさ。まあ、それでも小さな小競り合いくらいで済んでいたんだよ。それが二十年ほど前かねえ。海沿いの若者が、町の人間を襲って大怪我をさせてしまったんだ。それも後遺症が残るようなね。それからお互いほとんど関わらなくなってしまったのさ。人間だもの、海沿いの住人が皆、乱暴者だなんて思わないけど、怪我をしたのは町の有力者の親族だね。そんなわけで、おおっぴらに交流することがなくなってしまうたんだよ。だから、あつちのことはあたしにもあまりわからないんだ」

「そうですか……。わざわざ教えていただき、ありがとうございます」

ルーナが礼を述べると、女将は「いいんだよ」と、人の好きそうな笑みを浮かべた。

お礼に雑貨屋に置いてあったクッキーと飴を買った後、ルーナたちが店を出ようとすると、女将が後ろから声をかけてきた。

「あんたたち、海沿いの方へ行くのかい？」

「はい、一応」

「そうかい。どうしてもって言うなら仕方ないけど、本当はあんまり行くのはおすすめしないね」  
「どういって？」

カインが訝しげに訊くと、女将は顔を顰めた。

「これはさっきの話とは関係ないよ。……実はね、あつちの方、最近変な病が流行ってるみたいなのさ」

「病、ですか？」

「そう。突然バタンと倒れて、だんだんと衰弱した後、起き上がれなくなるんだと。最後は意識が戻らなくなつて、そのまま冥界に旅立つつて話だ」

「それは、この辺り独特の病なのですか？」  
ルーナは、女将に尋ねる。

感染症には、その土地独特のものが存在する。原因ははっきりしないものの、発生するのはその地域限定というものだ。

女将に聞いた奇病も、アンセル付近で過去に見られた病ではないかと思つたのだ。

「いや、そんな病にかかった者なんてこれまでにないさ。それに聞いたところによると、奇病に倒れた者たちは、倒れるまではなんの病も患つてなかったらしい。まあ、そんなわけで、今海沿いに行くのはおすすめしないよ」

女将は、「可哀想とは思うけどね」と、同情を込めてつぶやく。

彼女自身は、海沿いの人間を疎んじているわけではないようだ。

「わかりました。ご忠告ありがとうございます。しばらくこの町に滞在していますので、また寄らせていただきますね」

「それは嬉しいね。あんたみたいな綺麗なお嬢さんや兄さんたちは、ええと……あれだ、目の保養ってやつだからね！」

女将おかみは悪戯いたずらっぽく言うと、カラカラと笑った。

そうしてルーナたちは、再度女将おかみに礼を言うと、今度こそ雑貨屋を出たのだった。

外に出た三人は、その場で立ち止まると、お互いの顔を見合わせる。

「奇病だつて……」

「普段、あまり交流のない町の人間が知るくらいだから、それなりに患者が出ているんじゃないか？」

リュシオンの指摘に、ルーナとカインはハツとする。

女将おかみが語った『町』と『海沿い』の二つの地域。二十年前の事件もあり、ほとんど交流が途絶え、お互いにより良い感情を持っていないのが現状だ。

そんな対立に近い状態の中で相手方の状況を知っているというのは、どういうことなのか。

単に、密かに交流していた者からの情報であれば良い。そうではなく、リュシオンの言うように隠しきれないほどの患者がいるとなれば、大きな問題だった。

「これは、一度ユアンやフレイルとも相談した方が良いな」

「僕もそう思います」

リュシオンの意見に、カインも同意する。

この町にきた目的は、神宝に繋つながる手がかり——ケネスを探すことだ。

しかしそのために、ルーナたちが奇病に感染することは避けたい。

「ケネスのこともだが、奇病についても詳しく調べるべきか」

「ええ。昼までにはまだ時間があります。もう少し、情報を集めましょう」

「それがいいね」

ユアンやフレイルとは、昼に宿で落ち合うことになっている。

それまでにはまだかなりの時間があった。

町の人や店に片っ端から話を聞いていけば、海沿いの集落で発生している奇病のことも、もう少し詳しくわかるかもしれない。

「今度は、あそこの武器屋を覗のぞいてみよう」

すぐ近くにある店は、軒下のきしたの看板に剣が交差したイラストが描かれていた。

これはよく知られた武器屋のマークである。

ルーナたちは、こうして残り時間を最大限使って、様々ところで情報を集めたのだった。

十

宿に戻ると、すでにユアンとフレイルが戻ってきていた。

五人は、昼食を頼むと二階の円卓の部屋へと向かう。



一階にある食堂ですでに作られていたのか、すぐに昼食の準備が整った。おそらく、リュシオンたちの気を引こうと、給仕を急いだ女性従業員の努力もあったのだろう。

食事中の給仕は断り、従業員が部屋を出ると、さっそくリュシオンが口火を切る。

「ケネスについて、そっちは何かわかったか？」

「いえ、あまり。ケネスという人物は姓と名前、両方含めて何人かいるようですが、皆さん二十代くらいの青年には心当たりがないようですね」

ユアンの語った内容は、ルーナたちが集めたものと一致していた。

「僕たちの方も、同じような結果です。ただ……『海沿い』のことは聞きましたか？」

カインの言葉に、ユアンとフレイルは不思議そうに首を傾げる。どうやら彼らは、海沿いについての情報は知らないようだ。

カインは二人に、町と海沿いという二つの地域について説明をする。

「なるほど、そんな場所が……これは部外者にはわからない事情だな」

「ああ、フレイルの言う通りだ。それから、もう一つ問題があった」

「問題、ですか？」

ユアンはコテンと首を傾げた。

すでに成人しているにもかかわらず、こういう仕草が似合ってしまうのがユアンである。

兄の様子を感慨深げに眺めていたルーナは、皆の視線が自分に集まっているのを感じ、慌てて口を開いた。

（そうだ、わたしが聞いたんだもんね）

「雑貨屋の女将さんが言ってたんだけど、海沿いの方では奇病が流行ってるらしいの」

「奇病？」

なんだそれは、と言わんばかりのフレイルが、眉間に皺を寄せる。

「なんの持病もない人が突然倒れて、衰弱していつてしまうんだって。最終的には起き上がれなくなって、意識も戻らなくなるみたい」

「……聞いたことのない症状だな」

フレイルは、考え込むように腕を組んだ。

幼い頃は、養父であるクヌートについて、あちこちの国を回ったことがあるフレイル。その彼でも、そんな病は初耳だった。

「流行っているということは、感染する可能性がある病ですね。いくら神宝のためとはいえ、自分たちが病に倒れてしまつては元も子もありません。どうすべきか……」

カインの言葉に、皆は黙り込む。

この町に来たのは、神宝の手がかりを得るためだ。

魔族との対立を余儀なくされている今、彼らに対抗できる唯一の手段とも言える神宝は、必ず手に入れておきたい。

だが、伝染病に罹患しては、戦うことすらできなくなる。それに、リュシオンとカインは大国の王子なのだ。公になれば国が混乱するほどの大事になる。

「では、僕が海沿いに行くというのはどうです？」

「兄様!？」

驚きの声をあげるルーナに、ユアンは軽く笑ってみせる。

「僕なら、何かあっても特に問題はないからね」

「何言ってるのよ、兄様!」

ルーナが声を荒らげるが、ユアンは落ち着いた様子で返した。

「本当のことだよ。でもまあ、奇病というのが本当に伝染するものなのか、そもそも本当に病<sup>やま</sup>なのかもわからないし。それを探るのも必要だ」

「そうだけど……」

不満そうなルーナの頭を、ユアンは目を細めて撫でる。

彼女が自分を心配して言っているのは、ユアンもよくわかっているのだ。

そんな兄妹を取りなすように、カインが口を開く。

「ユアンの言う通り、奇病なのかよくわかっていないのですから、それらも含めて調べましょう。

ただ、僕の印象ですが、症状を聞くと病<sup>やま</sup>というより毒の類<sup>たぐ</sup>いに思えます」

「ああ、確かにな」

カインの意見に、リュシオンも同意した。

ルーナも、その言葉を聞いてハツとする。

奇病。最初にそう聞いたため、素直に病気のなだろうと思ってしまったが、症状としては毒をも

られた時のものに近い。

蓄積することで症状が酷くなったり、回復してもしばらく不調が続いたりという毒は、確かに存在するのだ。

「実際に患者に会ってみないと、詳しくはわからないな」

「やはり、一度海沿いの方へ行ってみるのがよさそうだね」

「じゃあ、俺も一緒に行く」

ユアンに続き、フレイルが名乗りをあげる。それを受け、リュシオンは二人にうなずいた。

「わかった。ただ、危険な伝染病の類<sup>たぐ</sup>いなら、それ以上近づくな」

「ええ、もちろん」

「善処する」

「……」

返事をする二人を、ルーナは複雑そうに見た。

止めはしない——止められないが、どうしても心配になる。

そんなルーナに、カインが穏やかに話しかける。

「ルーナ、彼らなら無謀なことはしないでしょ。それに、僕が毒と言った理由は、症状についてだけじゃないんです」

「どういうこと?」

「距離です。町と海沿い——二つの地域に距離があるとはいえ、同じアンセルの土地であることに

変わりありません。何人も患者が出るような伝染病ならば、町にも一人くらいは患者が出てもおかしくない。なのに、こちらには誰も被害が出ていないのですよ」

「何か裏がありそうな気がするな」

フレイルの言葉に、皆はそれぞれ首肯した。

「それじゃあ、これから僕たちは海沿いに行ってみますね」

「ちよつと待って、兄様」

「ルーナ？」

声をあげたルーナに、皆が「納得したのでは？」といった視線を寄越す。それに怯むことなく、ルーナは宣言した。

「わたしも行く！ 危険なのはわかってるけど、わたしは白魔法の心得があつて、病にしる毒にしる、対応することができる。なら、一緒に行く方がより安全だと思っんだ」

ルーナの説得に、皆一様に渋い顔になる。

それは、彼女の意見がもつともなものに他ならないからだ。

全員、魔法の心得はある。しかし、治癒や解毒に特化した白魔法が扱えるのは、ルーナとフレイル、ユアンの三人だ。

だが、フレイルとユアンは簡単な応急処置程度しか使えず、ルーナのように解毒や大きな傷を一瞬で治してしまえるような魔法は使えなかった。

「だから、わたしも行く」

落ちていた声音で言い放たれ、皆は言葉を詰まらせる。

しかしやがて、大きなため息をついたリュシオンが口を開いた。

「わかつた。だが、十分気をつける。無理は禁物だ」

「うん、もちろん」

しっかりとうなづくルーナに、リュシオンは渋い顔だ。一応納得はしているが、それでも不本意であることには違いない。

「ユアン、フレイル。頼んだぞ」

「ちゃんと見張る」

「もちろんです」

短く答えるフレイルとユアンに、ルーナだけは不満げな視線を向けた。

(見張るとかって何!? わたし、そんなに無謀じゃないし!)

だが、そんな彼女の無言の抗議は、全員に黙殺されたのだった。

十

宿を出たルーナとフレイル、ユアンの三人は、メインストリートを南に向かって歩いていった。海沿いと呼ばれる地域は、メインストリートの先をさらに南に進んだ場所にある。その名が示す通り、海に近い場所だ。

それなりに距離があるため、最初は馬車を使う予定だった。だが、いきなり見慣れぬ馬車が入り込めば警戒される可能性がある。

そう考え、彼らは少しでも周囲を刺激しないよう、徒歩で向かうことにしたのだ。

メインストリートがあと少しで途切れるところで、ルーナたちは足を止める。前方に、人混みができていたからだ。

「何だろう？」

ユアンがつぶやいた時、人混みの方から怒鳴り声が飛んでくる。

「汚い手で触んじやねえよ！」

「お願い！ お願いだから!!」

男と、まだ幼い少女の声。それを聞いて、ルーナたちは顔を見合わせた。

「行ってみよう」

ルーナは言うと同時に駆け出す。すぐさま、フレイルとユアンもそれに続いた。

まばらに集まっていた人垣を抜けた三人は、中心にいる二人に目を向ける。

声から想定した通り、中年の男と、七、八歳の少女だ。

男はこの町の住人だろうか。生成りのシャツに、サスペンダーつきの茶色のズボンという、こちらでよく見るような服装だ。

少女の方は、接ぎの当てられた、着古した黄色のワンピース姿である。背中の中ばまである茶色の髪を三つ編みにして、両肩に垂らしていた。

大きな茶色の瞳に、そばかすの散った白い顔。素朴だが可愛らしい顔立ちの少女だ。

そんな少女を、男は忌々しそうに睨み付けている。よく見れば、少女が男のシャツを掴み、何かを必死にお願いしているようだ。

幼い少女を虐める男の凶にも見えるが、男は怒鳴りはすれど、少女に暴力を振るっているわけではない。むしろ、少女が掴んでいる服さえ離せば去っていきそうだ。

それを感じ取ったルーナは、この騒動に割って入っていいものか躊躇してしまふ。

「いい加減にしろっ！ このっ」

堪忍袋の緒が切れたのか、ついに男は大きく手を振り上げた。

(だめっ！)

ルーナが慌てて駆け寄ろうとすると、それより早くフレイルが駆けつけ、男の手を取った。

「さすがに、こんな子供に暴力は感心しない」

淡々と諭すフレイルに、頭に血が上っていた男も我に返る。

「……そうだな。すまねえ」

男は素直に謝り、振り上げた手から力を抜いた。それを確認し、フレイルも掴んでいた手を離した。

「いったい、何があったんです？」

ユアンが穏やかに質問すると、男は忌々しそうに少女を見る。

「何が何も、俺にもわからねえよ。いきなり服を掴んできたかと思ったら、助けてくれて。家

族が病氣らしいが、俺は医者じゃねえ。そう言ったにもかかわらず、服は離してくれねえし、ほとほと困ってたんだけ」

「医者……」

「この町に医者なんてたいそうなもんはいねえし、薬師くすりしもしばらく出かけてる。それも説明したんだが、とにかく助けろって言われてもなあ」

男の説明を、少女は俯うつむいて聞いている。否定しないところを見ると、すべて真実のようだ。

そんな中、野次馬の一人が声をあげた。

「こいつ、海沿いの子供こどもだろう。なんでこっちに来てんだ」

海沿い。そう聞こえた途端、少女の肩がビクリと動いた。

ルーナが最初に海沿いの話を聞いたのは、雑貨屋おかみの女将。彼女はそこまで負の感情を抱いてはいなかったが、両者にわだかまりがあるとは語っていた。

声をあげた男の嫌悪に満ちた声と周囲の様子から、この場にはそうしたわだかまりを持つ者の方が多いと知る。

少女も、町に来れば嫌悪の目を向けられることはわかっていようだ。それでもここに医者を探しに来た——つまり、家族の病やまいがよほど重症だということが察せられる。

「そういうわけだから、俺はもう行くぜ」

少女に服を掴まれていた男はそう言うのと、足早に去っていった。

それを見て、周囲の野次馬もだんだんと姿を消す。結局残ったのは、当事者である少女と、ルー

ナたちだけだった。

「君、大丈夫？」

少女の前に屈み、ユアンが優しく問いかける。

優しげで綺麗な青年に話しかけられ、少女は赤くなってユアンを凝視した。

「大丈夫？」

無言で見つめてくる少女に、ユアンはもう一度問いかける。すると、ようやく我に返ったのか、

少女は慌てて口を開いた。

「あ、あの、あなたはお医者さんか薬師くすりしさんを知ってる？」

「お医者様いしやさまや薬師くすりし様が必要なの？」

「お兄ちゃんおにいちゃんが病気なの」

「そう、お兄さんが……残念だけど、僕たちはこの町に来たばかりだから、お医者様いしやさまも薬師くすりし様も知らないんだよ」

「そう、なんだ……」

少女は、しょんぼりと頭を下げる。

「お兄さんは、どんな病気なの？」

ルーナが尋ねると、少女は泣きそうな顔で答えた。

「わかんないの。先週、漁から帰ったら、突然倒れちゃったの。それから何回も倒れるようになって、昨日からは起き上がれなくなった。だから、助けてくれる人を探そうって。でも、海沿いには

お医者さんも薬師さんもないの。町に行けばいるって知ってたから、ここに来た」

「そう……」

うなずいた後、ルーナはユアンとフレイルに目配せする。

病に倒れたという少女の兄。その症状は、奇病として語られたものに酷似していた。

「ねえ、海沿いでは、お兄さんと同じような人がいっぱいいるの？」

「うん。もう、これくらい倒れた」

そう言つて少女は、両手を広げてみせる。数をきちんと知らない少女は、手指の数で表現したのだ。

「十人……近所の人ばかりなの？」

「違うよ。うちの近所で倒れたのは、お兄ちゃんだけ。倒れた人は、海沿いのあっちこっちにいるよ。でもね、昨日トム爺ちゃんが死んだんだって……お兄ちゃんも死んじゃうの？ どうしたらいいの？」

わんわんと泣き出した少女の頭を、ルーナは優しく撫でる。

「伝染病ならば、真つ先に家の者に感染しておかしくない。でもこの少女は問題なさそう。そうすると、別の原因があるのかもしれないな」

「僕もフレイルと同じ意見だよ」

（結局、話を聞いただけじゃ判断はできない。確かめるためにも、彼女のお兄さんに会わせてもらうのが一番かも……）

少女を慰めながらルーナはそう判断し、フレイルとユアンに提案する。

「ねえ、わたし、この子の家に行ってみようと思うんだけど」

「ルーナ!？」

「病だとしても、空気感染するようなものじゃないみたいだし、どちらにせよ海沿いの方には行く予定だったんだもの。それにこんな話を聞いたら放っておけないよ……」

危険かもしれないが、海沿いの方に行くこと自体は決まっていたことだ。

すると、ユアンは仕方ないと言わんばかりに息を吐き、うなずいた。

「わかった。行こう」

「よかった。ねえ、あなたの名前はなんていうの？ わたしはルーナよ」

「ルーナ……お姉ちゃん？」

恥ずかしそうに名前を呼ぶ少女に、ルーナはキュンと胸を締め付けられる。

（やだ、ルーナお姉ちゃんだって！ うわーん、可愛いよお）

脳内では顔面崩壊しているのをおくびにも出さず、ルーナは笑みを浮かべる。

「それで、お名前は？」

「ドロシー」

「ドロシーちゃんかあ。とっても可愛いお名前ね」

「ママが付けてくれたの。パパもいつも可愛いって言ってくれた」

嬉しそうに語るドロシーに、ルーナはユアンやフレイルを指した。

「わたしと、このお兄ちゃんたち、海沿いの方に用事があるの。もしよかったら、ドロシーちゃんのおうちに寄らせてもらってもいいかしら？」

「ドロシーのおうちに？」

「ええ。ダメかな？」

「いいよ！」

ドロシーは嬉しそうに言うのと、ルーナが差し出した手を握る。

「じゃあ、一緒にお話ししながら行きましょう」

「うん」

ルーナはドロシーと手を繋ぎ、海沿いに向けて歩き出したのだった。

十

メインストリートが途切れると、途端に家の数が減った。

道も舗装されたものではなく、運搬用の馬車がギリギリ通れるような道幅だ。

建物がぼつぼつとあるだけの道をしばらく進むと、前方に家屋がいくつか集まる集落が見えてきた。

「あと少しだよ」

ドロシーは、ルーナと繋いだ手をぐんぐんと振りながら教える。

どうやら、前方に見える集落が『海沿い』と呼ばれる地域のようだ。

「あのね、ドロシーのおうちはあっちなんだよ」

集落に入ると、ドロシーは自分の家の方向へとルーナを引っ張る。その時、目の前から歩いてきた人物がルーナに声をかけた。

「おい、あんたら！」

ルーナたちが足を止めると、ドロシーは嬉しそうにその人物に近寄っていった。

「ボブおじさん！」

ボブと呼ばれた男は、駆け寄ったドロシーを抱きしめると、厳しい目をルーナたちに向ける。

がっしりとした筋肉質の体躯に無精髭。ボブは一見すると荒くれ者といった風貌だ。しかし、ドロシーに向ける優しい顔を見れば、その心根が悪いものではないとわかる。

「あんたら、この子連れ回してどういうつもりだ？」

「連れ回す……？」

驚くルーナを、男はじろじろ眺めた。それは、どういった人間かを探るような眼差しだ。

「あの、誤解があるようですが……」

ユアンは一步前に出ると、人好きのする笑顔を見せる。

「誤解だと？」

「はい。町でこの子と会いました、僕たちもこちらに用があったので、一緒に来たのです」

「町、だと？ おい、ドロシー、おまえ町に行ったのか？」

ボブの厳しい声音に、ドロシーは半泣きになってうなずいた。

「だって、だって、お兄ちゃんが死んじゃうかもって……町なら助けてくれる人がいるって思ったんだもん」

うえーんと泣き出したドロシーに、強く言ってしまったことを後悔するように、ボブは頭を掻いた。

「はあ。話はわかった。どうやら、あんたたちの言う通りみたいだな。悪かった」

「わかっていただければそれで」

「で、あんたらが医者ってことはないよな」

「残念ながら、僕たちは医者ではありません。もちろん、薬師でも」

「そうか……」

もともと期待していなかったのだろうが、それでも残念そうにボブは肩を落とした。

ルーナは、そんなボブに思い切って声をかける。

「あの、病が流行っているとお聞きしたのですが……」

「あ？ どっからそれを……」

「えっと、ドロシーちゃんと雑貨屋の女将さんです」

ルーナが正直に答えると、ボブは「はあ」とため息を零す。

「あのお節介な女将か。確かに奇病で倒れる者はいるが、伝染病じゃないぞ」

ボブは、釘を刺すように睨み付けながら言った。

伝染病が広まっていると公になれば、問答無用でその地域が焼き払われるなど、恐ろしい措置が取られる可能性がある。

ボブが慎重になるのも、致し方ないことだった。

「でも、何人かと同じ症状が出ているんだよな」

フレイルが指摘すると、ボブは忌々しそうに舌打ちする。

「確かにそうだが……伝染病なら、家族全員に症状が出てもおかしくないだろうが！ だが、そんな家は今まで一軒たりともないんだ」

「なるほど……」

フレイルはボブの言葉に、ただうなずいた。

肯定もしないが、否定もしない彼の態度に、ボブも思うところがあったのだろう。幾分落ち着いた様子で告げた。

「奇病が発症した奴らの家は、全員そこその距離がある。皆、顔見知りではあるが、奇病に倒れた者の多くは、お互いしばらく会っていないかった。伝染病のわけがないってことは、学のない俺にだってわかる」

「年齢や性別など、何か共通点などはないのですか？」

「いや、年齢はまちまちだ。ただ子供はいない。あと性別は男だけだな」

「男性だけ……それもおかしいですね」

ユアンの言葉に、ボブは我が意を得たとばかりにうなずく。



空気感染するような伝染病であれば、当然近くの者から感染していくはずだ。それに、病が性別を判別して感染するなどまずあり得ない。

二、三人ならともかく、十人以上の患者すべてが男性というのは、おかしい数字だった。

「これ、伝染病の疑いは低いんじゃないかな」

ルーナは、小さな声でフレイルとユアンに告げる。

「ああ。……やっぱり患者に直接会った方がいいな」

「だよな」

三人が小声で話し合っていると、ボブが思い出したように声をかけてきた。

「ところであんたたちは、ここにいったいどんな用があつたんだ？」

「人を探しているんです」

「人？」

代表して答えたユアンに、ボブは訝しげな様子で訊き返す。

「そうです。二十代の男性で、名をケネス。心当たりはありませんか？」

「ケネス？ 二十代のケネスっていやあ、一人しかいねえぞ」

「え!？」

驚くユアンに、ボブは隣に立つドロシーを指差した。

「ケネスは、このドロシーの兄貴だ」

「ドロシーちゃんのお兄さん……?」

「うん、お兄ちゃんの名前はケネスだよ！」

ルーナの問いに、ドロシーは元氣よく答える。

ルーナたちが探していた人物は、謎の奇病に侵おかされている患者のようだ。

三人は顔を見合わせると、ドロシーに尋ねる。

「お兄さんに会わせてもらえるよう、お父さんとお母さんに聞いてもらえないかな？」

「パパとママ……?」

ドロシーはつぶやいた後、伺いを立てるようにボブを見た。

そんな仕事を、ルーナたちが不思議に思っていると、ボブが口を開いた。

「ドロシーの両親は、三年前に死んだ。それ以来、ケネスが親代わりになってこの子を育ててきたんだ。その兄のためだから、ドロシーも必死だったんだろうよ」

「そんな……」

知らされた事実、ルーナたちは息を呑む。

パパ、ママと嬉しそうに語っていたため、まさかその両親がすでに亡くなっているとは思ってもなかったのだ。

ドロシーの両親は他界し、残る家族は兄一人。

そんな兄の生命の危機となれば、少女が冷たい仕打ちを受けるとわかっていても、助けを呼ぶために町へ向かうのも理解できた。

ルーナはドロシーに近づくと、身を屈めて彼女と視線を合わせる。